

学習指導に関する調査・研究委員会

第2章

研究の内容

〈第2章〉 研究内容

視点1

「基礎的・基本的な知識および技能を明確にし、確かな習得を図る」とともに、「思考力・判断力・表現力の育成を図る」具体的・効果的な言語活動を位置づけた単元構成と単元の評価の在り方

1. 「基礎的・基本的な知識および技能を明確にし、確かな習得を図る」学習活動と「思考力・判断力・表現力の育成を図る」学習活動

(1) 「基礎的・基本的な知識および技能を明確にし、確かな習得を図る」学習活動とは、

知識・技能の習得と思考力等の育成のバランス

各教科の指導において、それぞれの教科における基礎的・基本的な知識・技能を習得させることと、そうした知識・技能を活用して問題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することの双方が重要である。

例えば、算数、数学の学習において、計算や作図の意味を理解したり、身に付けたりするために繰り返しの練習（ドリル学習）は必要であるが、そうした学習活動ばかりが習得を図る学習活動として想定されているわけではない。多くの授業展開で行われているように、既習の知識・技能を使いながら（活用しながら）新しい知識・技能を身に付けていく学習活動も「習得」を図る上で重要である。

習得・活用・探究

習得・活用・探究を整理して考えると、学習活動は次のように定義される。各教科において行われる「知識・技能の習得を図る学習活動」、「知識・技能の活用を図る学習活動」、総合的な学習の時間を中心として行われる「探究的な学習」というように言える。

その中において、「基礎的・基本的な知識及び技能」や「思考力・判断力・表現力」は子どもが身に付けるべき資質や能力を表していて、習得・活用・探究はそのための学習活動の類型を示したものである。

また、習得・活用・探究というそれぞれの学習活動は完全に切り離せるものでないし、また、常に「習得→活用→探究」という方向のみに進むものでもない。

例えば、三角形の面積公式を身に付けるときも、三角形や四角形など図形の意味という知識が基になるし、長方形の面積を基にして三角形の面積公式を導き出すという授業が行われている。子どもたちは、具体物や図を用いて三角形の面積の求め方を考えるし、考えたことを言葉や図、数、式などを用いて表現し説明していく。こうした学習活動を通して、既習の知識を活用し、面積の求め方を考え、言葉や式に表現するという力が育てられるのである。この場合、三角形の面積公式という新しい知識を「習得」する学習活動ということができるし、既習の図形や面積の知識・技能を「活用」して問題解決をしているということもできる。

(2)「思考力・判断力・表現力の育成を図る」学習活動とは、

思考力・判断力・表現力の育成を図るには

子どもたちが問題解決学習を基盤にした学習の中で、解決のために自分なりの考えを持ち、友だちと考えを交流することで、自分の考えを高めたり深めたりしながら、よりよい解決に進んでいくと考えられる。つまり、問題や課題に対して、思考し、どの考えがよいか判断し、第3者に表現することが求められている。

これらの活動には、言葉が大切な役割を果たす。例えば、感じ取ったことを言葉で表現したり、理解したことを言葉で表現したり、考えたことを言葉で論述したり発展させたりすることができる。

国語科においては、話すこと、聞くこと、書くこと、読むこととのそれぞれに言語活動がある。理科や社会の学習での観察や実験では、日常の言葉に加えて、表やグラフなどを用いて結果を考察し、表現していくこともできる。さらに、算数や数学で学習する数や式、図なども思考や表現のための優れた方法であり、広い意味での言語である。

こうした言語は、論理的に思考したりコミュニケーションを進めたりするための基となり、学習活動の基盤となるものである。

つまり、自分の考えをまとめ、考えたことをだれかに伝えたり、伝えられたりする言語活動を充実させることが思考力、判断力、表現力等を育むために重要であると言える。

単元構成を考える際に

単元構成を考えるときに、言語活動をどのように位置づけられるか考えることは大切である。問題解決学習を基盤とした学習の中で単元のどの時間で言語活動を行うかを吟味しておく必要がある。その際、教科の特質や学年の発達段階等を考慮する。単元を構成する際、次のような場面での言語活動が考えられる。

- ①オリエンテーションなどの体験やゲームを通して、単元を見通す場面の言語活動。
- ②主に習得させる場面での言語活動。
- ③主に活用する場面での言語活動。
- ④次の単元や自分の生活に生かす言語活動。

これらの言語活動を単元の中で繰り返し、意図的に行うことで、子どもたちに、思考力、判断力、表現力を養うことができると考えた。

問題解決学習を基盤とし、「課題意識（問題意識）」や「解決への見通し」を持ち、「自ら考え、伝え合う場」を意図的・計画的に設定した学習過程の工夫と1単位時間の評価の在り方

1. 「課題意識（問題意識）」や「解決への見通し」を生む導入時の工夫

問題意識を高め、解決への見通しを持たせる

子どもの学ぶ意欲を向上させ、自己解決力を育むためには、まず子ども一人ひとりに「なぜだろう?」、「自分もやってみたい!」、「もし、〇〇だったらどうだろう?」といった問題意識を高めることが必要である。

子どもの課題意識（問題意識）を高め、自ら考える力や解決しようとする意欲につながるためには、単元との出会い、あるいは、1単位時間ではじまりの部分、つまり導入時の工夫を図ることが重要になってくる。

- ◆授業の導入時に、学習の見通しをもてる題材や課題を取り入れること
教師が意図的に子どもに気づきなどを今後の学習に生かすこと
- ◆ある事象をじっくり観察し、不思議な現象に触れたりすることで、子どもたちの「なぜだろう?」、「こんなことに気づいた!」、「自分もやってみたい!」などの知的好奇心が喚起され、追究意欲も高まること

問題意識を高め、解決への見通しを持たせる場面での言語活動

導入では、体験やゲーム身近な題材や課題などから学習への見通しを持ち、意欲を高める場面である。教師と子どもたちのかかわりを通して、体験などから感じ取ったことを表現するようにしていきたい。

2. 「自分なりの考えを持つ」ための教師の支援策

「自分なりの考えを持つ」ために

前日までの学習事項との関連や次時以降に学習していくこととのつながりを教師が意図的に子どもに意識させることが大切になる。

例えば、本時の学習の終末場面において、次時に学習する事項が子どものつぶやきとして表出するような学習展開にしたり、学習のふり返りで出された気づきや疑問を次時の学習の課題に設定したりするなど、子どもの思考が連続するような学習をすすめていきたい。

「既習事項を活用することで解決できる」といった経験を数多く積むことで、子どもにとっては既習事項の大切さを実感することができるとともに、ノートや教科書で前日までの学習を振り返る習慣が身についたり、既習事項は活かさないだろうかと考えながら解決に向かったりするなど、主体的な姿勢とともに学び方そのものが身につくであろうと考える。

- ◆学習する内容と既習してきた内容との流れをつなげ、思考の連続性や整合性を子どもたちに持たせることで、見通しを持ち主体的に学ぶ姿

勢をつくること

- ◆既習や前時と比較し、どこが今までの問題とちがうのか焦点化する。焦点化することで、子どもたちに活用する意識を持たせる。
- ◆どこが問題になっているか確認し、「今何が問われているのか」、「何を求めるのか」を明確にすることで、問題を共有する。
- ◆課題を把握し、「みんなでここを考えていこう」「これを確かめたい」をとらえ、どうなったら解決かを全員で確認し、解決の方向性を共有する。
- ◆いろいろな考え方の賞賛し、今までにやってきた考え方を使い、どの考えを活用できるのか子どもたちが明確に意識できるようにする。

「自分なりの考えを持つ」場面での言語活動

課題に対して自分なりの考えを持つ場面は、言語によって考えるので、言語活動そのものと言える。課題について構想したものを実際にノートやワークシート等に表現する。この際の言語とは、言葉だけでなく、式や図など自分の考えを表したものを含める。

さらに、前時までの学習で学んだことを活用することも考えられる。

3. 「仲間と学ぶ場」を意図的に設定する

仲間と共に学ぶことの大切さ

一人ひとりの自力解決の段階では、考えに自信が持てなかったり、多様な方法には気づけなかったりすることも予想されるが、教師の意図的・計画的なかわりのもとに、全体で交流し合うことでより考え方に深まりや広がりを生むことができ、「みんなで学ぶよさ」を実感できるだろう。みんなで学ぶよさを実感することがみんなで生活することのよさへととなり、よりよく生きる力へと発展することが期待できる。

- ◆共通のつまずきを解決しあったり、自分たちの解決方法について比較・検討したりする鍊りあいの場面を設定することにより、互いに認め合い、高まりあう経験を重ねていくこと

小集団交流の場の設定

小集団交流の場を意図的に設定することにより、子どもたち自らが必要な情報の受発信をし、自分や友達の考えを比較検討、結果を吟味、一般化の方向でまとめたりする。その中で、自らの考えを深めたり、修正したり、新たな問いが生まれたりする。教師は授業の中で、子どもの思考や解決を見取り、意図的に交流に向かわせる支援を行うことで、素朴な疑問が解決されたり、考え方が整理されたり、新たな解決への視点が生まれたりするなど、ある一定の解決を子どもに委ねることができる。

◆小集団交流のよさ

- 全体で発表する自信がない子どもも自分の考えを主張する機会ができる。
- 同じような解決方法に触れ、自信を深めることができる。
- 解決途中の行き詰まりを解消する情報を手に入れることで、課題を解決するという成就感を得ることができる。
- 異なる考えの子どもと交流することで、考えを強固にしたり、あるいは修正することで自らの考えを高めたりすることができる。

◆小集団交流の留意点

- 常に気の合う友達との交流に終始してしまい、自分の考えを広げきれないことがないようにする。
- 単なる教え合いや発表のし合いにならないようにする。
- 交流の場に教師が積極的に入っていき、交流の様子を把握するようにする。
- 自力解決ができていない子どもに、ヒントになるような考えの子との交流を促すようにする。

全体交流時の教師のかかわり

一人ひとりが自分なりに解決した段階から、それぞれが情報を受発信して友だちと比較検討し、よりよい見方や考え方へ高めていく。しかし、子どもたちだけに委ねてしまう活動で終わってしまうのでは、一人ひとりが十分な納得を得られなかったり、検討を進めているうちに新たな疑問に突き当たったりし、よりよい解決へ向かう途上の状態になることもあるはずである。

そこで、より多くの子どもと教師によって力を集結しながら練り合うことで、よりよい解決へ高めることを目指した全体交流の場を設定する必要がある。多くの友達と練り合うことで内容的に一步、一段深まった実感の伴う解決を経験することが真の意味での“仲間と共に学ぶよさ”の意識を育てることになると考える。

- ◆自分たちが考えたことや方法が「本当に正しいのか?」、あるいは、「どんな時にも当てはまるのか?」などを子ども一人ひとりに問いかけ、確かな学び、深まりのある学びにするために、ゆさぶりの発問を事前に準備しておく。
- ◆それぞれの考えや方法を比較検討する場を設けることで、共通点を見出したり、相違点を明確にしたりすることができる。その結果、見えないものが見えてきたり、課題がはっきりしたり、一般化が図られるようになる。
- ◆自己評価・相互評価をする場面を多く取り入れ、自信をつけたり、今後の学びに生かそうとすること。

仲間と共に学ぶ場面の言語活動

互いの考えを伝え合い、自分の考えや集団の考えを発展させることが大切である。